

- ① Well-Being指標に続き、ロジックツリーの作成作業を加速させていくことにより、地域課題・課題に応える施策の**解像度**が上がり、**課題・施策を「自分ごと化」**しやすくなる
 - **当事者意識を持ちやすい解像度の課題・施策**にまで整理できる。例えば「医療・福祉の充実」と耳にしてもピンと来なかった人も、「在宅ケアサービス・体制の充実」ならピンと来る場合も。地域課題の**担い手が増える**大きなきっかけにもなるのではないかと
 - 関わる地域を域外から探す場合にも、**興味あるテーマ・領域が盛り上がっている地域**や、**自分のスキル・経験が活かせる地域がデータをもとにわかる**ように
- ② ロジックツリーをトップダウンで作成することにより、さまざまな部局の施策が持つ潜在的な相関関係（例えば、健康増進とモビリティの充実）が見える化され、**主体者が明確に**。**分野を跨いだ政策課題**のボトルネックを刺しにいくことができる可能性
 - 実態ベースで見れば、**1つの政策課題に複数の分野・部局が関わっている**ケースは多々あるが、この部局の跨りこそが、本当に必要な結果に対して、**責任・ボールを誰もが持ちにくい構造**を生んでいる
 - 第3水準まで国がリファレンスを提供することで、**自治体の役場・役所内での主体者が明確になる**。**役場・役所外から役場・役所を巻き込む**場合にも有用
- ③ ソーシャルインパクトが測りやすくなれば、**企業版ふるさと納税**はじめ、外部からのファイナンスを加速させられる可能性も
 - デジタル庁のWell-Being指標分析ツールが整備されつつある今、データの提供体制がすでに整ったKPIをロジックツリーに組み合わせれば、**リアルタイムEBPM**が実現する。投資結果が計りやすくなれば、社会的投資をしやすい機運・流れができる可能性も